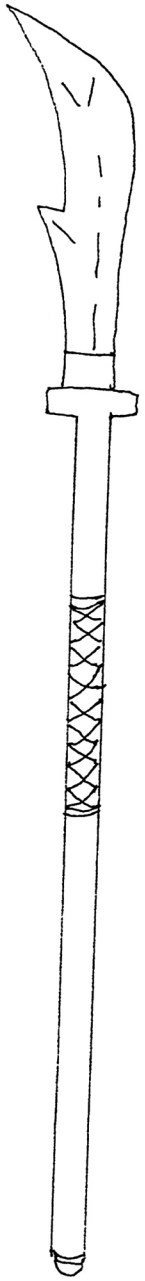

大刀

一

亀伏山の砦は思っていたより大きく、そして堅牢そうだった。李逵は、漸く辿り着いた砦の柵に身をあずけ、これまでの苦行に想いを馳せていた。危なかったと思った。いつ皆殺しにされていてもおかしくなかった。

一つ一つのささやかな幸運が、やがて大きな僥倖を齎せてくれた。李逵はそこに、人の力だけではない、何か大きな天命のようなものを感ぜざるを得なかった。天は嬢さんを援けなすった。李逵はそう思った。

砦は、半径一里ほどの半円を描いていた。頑丈な木の柵が三段に組まれていて、さすが蘇源が築いた砦だった。柵と柵の間には、落とし穴や檑木※など、様々な罠が仕掛けられていた。巧妙に仕組まれてはいるが、千人規模の大部隊に襲撃されたらとても持ちこたえられそうになかった。

※檑木　城壁や砦の上から敵を落とす、両端に縄がついた丸太。

長居は出来んな。深まる闇を見据えながら、李逵は小さく呟いた。

砦に着いてからまだ二刻も経っていなかった。疲労は澱のように、身体の深いところに溜まっていたが、誰もそれを口にする者はいない。李逵自身、確かに疲れてはいるのだろうが、それを感じているような余裕はなかった。一人一人、素晴しいはたらきをしてくれた。その力が集まって、嬢さんを助け出すことが出来た。李逵は初めて、天に感謝したい気持ちになった。もしも嬢さんの命が失われていたら。それは、李逵にとって耐え難いほどの喪失だったに違いない。李逵だけではない。苦難を共にしてきたあの若者達には、それはおそらく、李逵以上の悲しみになっただろう。大火傷を負い、肉体的にも精神的にも大きな傷みを受けたが、とりあえず命だけでも助かってよかった。李逵は心の底からそう思った。生きてさえいれば、取り返しのつかないことなどほとんどない。

生き抜くこと。それが、四十歳以上生きて来た李逵の信条だった。雪華を始め、この若者達は、李逵の半分も生きはいてない。この若者達を死なせてはならん。李逵はあらためてそう思った。

「食事の用意をします」

曹瑛が李逵に言った。

「そうだな、朝からほとんどものを食っておらん。こんなことでは、何をするにも力が出ん。曹瑛、おまえも疲れておるだろうが、ここはひとつ、おまえに頼むしかない」

「石勇が手伝ってくれますから」

「おお、そうか、石勇も一人で暮らしておったのだったな」

「結構上手なんですって。本人の言うことですけど」

李逵は思わず笑ってしまった。他愛ないこんな言葉を交わせるのも、雪華を助け出せたからだった。確かに雪華は傷付いたが、命を失うという最悪の事態は避けることが出来た。それだけでもよしと考えるべきだった。太原府の廂軍や禁軍を相手に、よく生き延びることが出来たものだと思った。あの時は逃げるのに精一杯で、自分の命など顧みることもなかった。今思い返すと、死んでもおかしくない場面は何度もあった。

その度に、まるで天が援けてでもくれるように、何とか危機を乗り越えた。ここぞという時に、陳統、晁蓋が、さらには黄玉、聞起が現れた。まさに天運、不思議なほどの間の良さだった。雪華が薬で眠らされていたのも、傷の痛みを考えればむしろよいことだったと思えた。意識があったら、あの傷を負ってここまで運ぶことは困難だったろう。まして、あれだけの戦闘を潜り抜けねばならなかったのだ。意識があったら、たとえ雪華でも音を上げていただろう。李逵は、これも天の加護なのかもしれないと思った。

「小父さん、まだ要るものはあるかい」

陳統の声だった。

「今のところは十分だろう。おまえが村から持ち出してくれた物で間に合いそうだ。よくこれだけの備えが出来たものだ」

「用意したのは俺じゃないよ。伍小母さんが揃えてくれたんだ」
「そうか。そう言えば、伍氏に報せねばならん。夜のうちに発ったほうがいいだろう。幸い月が満ちておる。誰か遣らねばならんが、寇汪が残っておったな。ここにおれば、命を失うことになるかもしれん。今夜のうちに発ってもらうとするか」
寇汪は、蘇源に李逵の言葉を伝えた後も亀伏山に残っていた。そのおかげで、迷うことなく李逵達は、この砦に辿り着けたのだった。蘇源の部下も三人ほど残っていた。蘇源は全員連れてきたと言っていたが、後のことを考えて砦に人を残していたようだった。蘇源らしい気配りだった。落ち延びる先はここ。蘇源はきっとそう予測していたのだろう。李逵は、惜しい漢を失くしたと思った。生きていれば、これからの雪華の戦いに、大きな力を発揮してくれただろう。だが、蘇源の気持ちも痛いほど分かった。蘇源は、死に場所を探していたのだ。家族を殺され、自分もまた復讐のために人を殺し、そして賊となって戦の修羅場に身を置くようになった。そんな日々の中で蘇源は、死ぬにふさわしい時、死ぬにふさわしい意義を探していたのだろう。たまたまそれが今日だったということだ。だからあの時、自分の制止を振り切ってまで禁軍指揮官に突っ込んで行ったのだ。蘇源のそんな気持ちを、李逵は非難することが出来なかった。何となれば、李逵自身、三歳前同じ気持ちを抱いていたからだった。賊となって、戦いに明け暮れる日々に疲れ果て、李逵は一人銅提山を下りたのだった。そして、たまたま入り込んだ亀伏山で、九天玄女に出会ったのだった。

九天玄女は不思議な人だった。自分は王安石の娘だと言っていた。王安石といえば、神宗の頃に宰相を務めた、新法の提唱者だった。李逵も王安石の新法ぐらいは知っていた。青苗法、市易法、均輸法、保甲法、保馬法などを制定し、国の財政を立て直そうとした宰相だった。しかし、そうした性急な改革につきものの、反対派による抵抗に遭い、それが大きな政争にまで発展したため、宰相を罷免されてしまったのだった。王安石に全幅の信頼を置いていた神宗の死が、それを決定的

なものにした。
神宗の死の翌年、元祐元年※四月、王安石は江寧府でひっそりと世を去ったということだった。奸臣、佞臣の多い中で、王安石はまともな方だったと李逵は思っていた。そんな王安石の娘だと、九天玄女は言っていた。王安石が科挙に及第して、それほど経っていない頃のことだと言っていた。王安石が科挙に及第したのは、李逵の聞いたところは慶暦二年※の時だから、九天玄女は少なくとも七十にはなるはずだった。李逵が初めて会った三歳前でも、六十七ほどということになる。とてもそんな年齢には見えなかった。四旬※ほどにしか見えなかった。体質なのか、特殊な法力でもあるのか、本人の言っている年齢と見た目のそれには大きな隔たりがあった。

※元祐元年　一〇八六年。※慶暦二年　一〇四二年。※四旬　四十歳。

自分の生き方に迷っていたそんな時に、李逵は九天玄女に出会ったのだった。偶然とは思えなかった。何かにひかれるように、李逵は亀伏山に入り、更にその奥へと足を踏み入れた。何が李逵をひきつけたのか、今になっても分からないままだ。だが、どうしても行かねばならない。その気持ちだけは、今でもはっきり憶えている。

「食事の用意が出来ました」

曹瑛の声だった。

「背と腹がくっつきそうだ」

陳統の声は、弱弱しさをよそおっていた。どんな時でも笑いを忘れない、陳統の長所の一つだった。

「沢山作ったから、皆いっぱい食べてね」

曹瑛の顔にも笑みが浮かんでいた。李逵はそれを見て、本当に笑顔の似合う娘だと思った。雪華を中心として、黄玉、聞起、曹瑛、陳統、石勇と、よくこれだけ素晴しい若者達が集まったものだと、李逵は心の底から感心した。確かに、賊に襲われ親を亡くしたという試練はあったが、同じような境遇の若者達は、それこそ掃いて捨てるほどいる。この若者達がここまでになったのは、もちろん本人達の資質もあるが、それ以上に、核となる雪華の存在が大きかったのだろう。そして雪華

は、李逵自身の生き方すら変えてしまった。雪華と過ごしたこの三年、李逵はそれまで感じたことがないほど平静な心でいられた。魯櫂によって破られるまでは。

九天玄女に出会い、宋家村に行って保正の娘を助けよと言われた時、李逵はまだ半信半疑だった。宋家村の場所も知らなかったし、ましてや保正の娘など、知る由もなかった。だが九天玄女は、おまえの虚しさは生きる意味を見失っているせいだと言った。それを見付けるために、おまえは宋家村に行かねばならぬと言った。今思えば、九天玄女は宋家村の悲劇を知っていたのだろう。そして、宋雪華という娘に関心を抱いたのだろう。そういえば、何日か九天玄女の下にいた時に、頻りに男女が出入りしていた。あの者達の身ごなしは、とても普通のものとは思えなかった。おそらく間諜※か何かだったのだろう。山の奥深くで暮らしていながら、そうして様々な情報を手に入れていたのだろう。不思議な存在だったが、李逵にとっては恩人だった。九天玄女に出会わなかったら、そして宋雪華に巡り合わなかったら。今の李逵には、そんな自分の人生は考えられなかった。生きる意味を失くした男が今、生きたいと切実に願っていた。自分のためではなく、この若者達のために。※間諜　スパイ。

「陳統、寇汪を呼んでくれ」

粥に息を吹きかけていた陳統に、李逵が小声で言った。

「寇汪なら一の木戸にいたな。いいよ、すぐに呼んでくる」

陳統は熱い粥が満ちている椀を置いて、一の木戸に向かって駆け下りていった。素早い身のこなしだった。腰よりも高さのある大岩を、手も使わずに飛び越えていった。一の木戸には灯りが点され、数人が板で補強したり、石を積み上げたりしていた。二の木戸、三の木戸でも同じような作業が続けられていた。深まりつつある闇の中で、三つの小さな灯りと、食事の場の大きな灯りが、静かな山中に夢幻のように浮かび上がっていた。

「無用様、何か用事でも」

顔中土だらけにした寇汪が訊いた。

「おお、早かったな。作業の途中に呼び出して済まぬ。儂はもう無用ではないが、まあそんなことはどうでもよい。おまえに頼みがあるのだ」
「何でしょうか」
「宋家村に戻ってほしい」
「宋家村に……」
「伍氏に、ことの次第を伝えてほしいのだ」
「私でなければならんのでしょうか」
「陳統や聞起には残ってもらわねばならん。宋家村への道に詳しいおまえが適任だ」
寇汪の顔は不満そうだった。
「不満か」
李逵の声に険しさはなかった。
「いえ、そんなわけではありませんが」
「伍氏は一人で館を守っておる。夜が明けたら、太原府の役人が村に向かうだろう。その時に、嬢さんの消息を知っておるのとおらんのとでは、伍氏の心構えが違うだろう。伍氏には、嬢さんが火傷を負ってはおるが命に別状はないと伝えるのだ。ここの場所を告げてはならん。知らない方がいいだろう。万が一、拷問に遭うようなことがあっても、知らぬものは答えようがない。冷たいようだが、儂らは逃げ延びねばならん」
「分かりました。ですが……」
「ですが、何だ」
「私は、もうここに戻ってはならんのでしょうか」
李逵は一瞬言葉を詰まらせた。
「そうだ、ここにおれば命の保証はない。おまえをそんな危険な目に遭わせたくはない」
寇汪は、はっきりと失望の色を顕せた。
「そうですか、やはり私では足手まといということですか」
李逵はその言葉に答えなかった。寇汪が、雪華のために少しでも力

になりたいと思っていることはよく分かっていた。だが、李逵は出来る限り犠牲を少なくしたかった。たとえ、直接戦闘に加わらなくても、黄玉や聞起のように戦う術を知っている者達とは異なる。後方で支援している者達が真っ先に狙われるということは、実際の戦では珍しいことではない。李逵は心を鬼にした。

「そうだ、足手まといだ。おまえを護るような余裕はない」

寇汪は頭を垂れた。

李逵は寇汪に背を向け、足早に雪華の様子を見に向かった。背中で寇汪のすすり泣きの声が聞こえてきた。

・・・・

雪華は、砦の奥の蘇源がいた小屋に横たえられていた。雪華の隣では、黄玉が黙って付き添っていた。黄玉は、瞬きするのも忘れているように、ただじっと雪華を見詰めていた。

「どうだ、嬢さんは」

李逵は労るように黄玉に訊いた。

「大丈夫です。もうそろそろ覚めそうです」

「黄玉、おまえも少し休んだらどうだ。朔州から駆け通しだったのだろう。疲れが溜まっておるはずだ」

「いえ、御心配には及びません。まだ疲れを感じてはおりません」

「そうか、それならよいが」

李逵はそれ以上勧めるのをやめた。普段なら理で動くことの多い黄玉が、こと雪華に関しては、まるで別人のように情でしか動かなくなる。それも苛烈なほどの激しさで。そこには、余人が入り込めないほどの強い結びつきがあるようだった。三歳前に命を救われた、それだけではない思慕の想いを、黄玉は抱いているようだった。そして、それに応えるように、雪華も黄玉を信頼しているようだった。時にそれは、曹瑛を哀しませるほどに。

「食うだけは食っておけ。腹が減っていては、いざという時力が出ん」

黄玉は微かに頷いた。
「曹瑛が食事を用意しておる。うまそうだぞ」
「曹瑛が。それはおいしそうだ」
「石勇が作ったものもあるらしい。それは食わん方がよい。さっき晁蓋が顔を顰めておった」
黄玉が笑ったようだった。その美しさに、見慣れているはずの李逵でさえ、一瞬とまどったような顔をした。
「李逵様は」
「儂は後で食う。嬢さんには儂が代わりにつく。早く行ってこい」
「ありがとうございます。さきほど布替えをしたばかりです。わたしが戻るまで、そのままでよいと思います」
「分かった。さっさと行ってこい。せっかく曹瑛が作った食事が冷めるではないか」
黄玉が去った後、李逵は雪華の顔を覗き込んだ。息も安定し、顔色も随分と良くなっていた。時々、瞼を細かく震わせていた。そろそろ目覚めそうな気配だった。
「嬢さん、辛い思いをさせて済まなかった。儂は慙愧に耐えん。いまさら何を言っても愚痴にしかならんが、儂がもう少ししっかりしておれば、こんなことにはならんかったかもしれんのに……」
李逵はそっと雪華の手を握った。命の暖かさが、雪華の手を通じて李逵の心の中に注ぎ込まれる。この人に死なれたら、この世でそれ以上の悲しみはないだろう。李逵は痛切にそう感じた。
聞起が李逵の隣にやって来た。李逵が顔を向けると、聞起の目にうっすらと涙が浮かんでいるのが見えた。本当はあの時、自分と一緒に雪華を助けに行きたかったはずだった。それを堪え、黄玉と阿骨打のもとに行ってくれた。よくやってくれた。李逵は心から聞起に感謝した。
「聞起、おまえのおかげで助かった」
「でも、姉ちゃんの身体は、もう元に戻らない」
「出来るだけのことはするが、疵は残るだろうな」

「俺達がもっと気を付けていれば……」
「聞起、それならば責めを負うのは儂だ。だがな、これも一つの運命かもしれん」
「こんな運命なんて辛すぎるよ」
「そうかもしれん。しかし、命を落としていても仕方のないところだったのも事実だ。それは、嬢さんだけではない。儂かもしれんし、おまえだったかもしれん。いや、今ここにいる全員が死んでおってもおかしくはない。むしろ、これだけの犠牲で済んだのは、とてつもない幸運と思わねばならん。だからな聞起よ、後悔するのはやめだ。こうして嬢さんは生きておる。そのことに、感謝しようではないか」
「でも……」
「おまえ達の気持ちは分かる。儂だって、嬢さんを傷付けられて悔しいのは同じだ。だが、過ぎたことを悔やんでも仕方がない」
聞起は納得したような様子ではなかったが、それ以上言いつのることはしなかった。
「それより、おまえに頼みがある。明日の夜明けとともに東汾山に行ってほしいのだ」
「東汾山……」
「ここから南に二百里ほどのところだ」
「そんなのはわけないけど。何のために」
「儂の部下だった男がいる。呼んできてほしいのだ」
「さっき、曹瑛から聞いたよ。蘇源さんて人も小父さんの部下だったって。姉ちゃんを助けるために、雄雄しく戦ったって」
「ああ、見事な散りざまだった。立派な漢だった。だが、蘇源はもういない。だから人手が必要なのだ」
「分かった。大勢で攻められたら、もって三日だと思うよ、ここは」
「さすが聞起だな。この人数では、いかに頑丈な砦とはいえ、五百で攻められたら五日、千で攻められたら三日ともたん。奴等は必ず来る。廂軍だけなら太原府も知らぬ顔が出来ただろうが、禁軍の都監を殺されておる。開封府が黙っておるわけがない。太原府とて、頬かむりは

出来んだろう」
「今度は大変だね」
「今度もだ」
李逵と聞起は、顔を見合わせて頷き合った。
「その人の名は」
「陳達。跳澗虎という綽名だ」
「跳澗虎。川を跳び越える虎……。そんなに跳べる人なのかな」
「二丈ほどの川なら跳び越えておったな。崖の上からもよく跳び下りておったわ。もちろん、それだけの男ではないがな」
「小父さん。明日の夜明けなんて言わずに、すぐ発つよ。今夜は月明かりで道がよく見えるから」
「そうか、それはありがたい。山に入って陳達に会ったら、こう言ってくれ。黒旋風が呼んでいるとな」
「信用するだろうか」
「陳達の右肩には青痣がある。それを知っておるのは限られた者だけだ。そして、蘇源のことも話せばいい。疑うことはせんだろう」
「そうだね」
「聞起、疲れてはおらんのか」
「大丈夫さ。姉ちゃんのためだ。弱音を吐くわけにはいかないよ」
「あれだけの道のりを駆けてきたのだ、朧月も疲れておるだろう」
「朧月は、普通の馬とは違うよ。あいつのことは俺が一番知ってるよ。まだ十分走れる」
聞起はそう言って、三の木戸に繋いでいる朧月を見た。
「それからな、聞起」
「まだ何かあるのかい」
李逵は少し言い難そうに、聞起から目を逸らした。
「何だよ、黙ったりして」
李逵は思い切ったように、聞起の目を見た。
「黄玉がここに来る途中、儂に言ったのだが。おまえがつけた綽名、あれに随分と怒っておった」

聞起はまずいという顔をした。
「しまった。誰から聞いたんだろう」
「呉乞買だ。その時は平気な顔をしておったが、黄玉はあれで繊細なところもある。おまえがつけたということで、かなり落ち込んだようだ」
「そうか、本気で鉄面女なんてつけたわけじゃないんだけど」
「黄玉は、嬢さんは別格としても、おまえと曹瑛は信頼しておる。同い年だしな。陳統と石勇には年が下ということもあって、もう一つ物足らないようだがな。だから、信頼しているおまえがそんな綽名をつけたので落ち込んでおるのだ」
「分かった。この仕事が終わったら黄玉に謝るよ」
「それがいい。ついでにいい綽名を考えてやってくれ。黄玉はおまえに、神行太保という綽名を考えていたそうだぞ」
「神行太保……。神のように速い太保※か……。うん、気に入った」
※太保　道教の神。
「儂もいい綽名だと思う。黄玉もなかなかやりおる」
「黄玉にもいい綽名を考えておくよ。それじゃ、もう発つとしようか」
「月明かりがあるとはいえ、この山の地形は複雑だ。怪我のないように気を付けることだ」
「分かってるよ。じゃあ」
聞起の後姿を見送りながら、李逵は今後の備えについて考えた。太原府かあるいは開封府から、いずれ討伐の兵が来るのは間違いなかった。禁軍の都監を殺している。禁軍の面子を潰したということだった。おそらく来るのは禁軍。それも、開封府の精鋭部隊だろう。同じ禁軍とはいえ、地方駐屯部隊と首都開封府の禁軍とでは、その士気に大きな違いがあることは十分考えられる。唯一の望みは、首都禁軍の驕りだった。地方禁軍に比べ、首都禁軍は自尊心が強いと聞いている。特に、首都禁軍の頂点に立つ童貫、殿前司の高俅がそうだと聞いていた。しかもこの二人は何かといがみ合い、対立していると聞いていた。うまくいけば、こんな僅かな人数しかいない賊達に、大軍を出す

のは恥だと、お互いを牽制し合うかもしれなかった。だが、そんな僥倖をあてにするわけにもいかない。とにかく、数が絶対的に足りなかった。蘇源の生き残った部下を入れても、二十人余りしかいなかった。ましてや、動かすのもままならぬ雪華を護らなくてはならないのだ。陳達に期待するしかなかった。

おそらく陳達は、銅提山の頃の部下を、かなりの数率いているはずだった。蘇源に比べ、陳達は親分肌のところがある。個人の武も、陳達の方が優れていた。百人連れて来てくれれば。李逵はそう祈った。

黄玉が、曹瑛を連れて戻って来た。二人とも、疲れの色は隠せなかったが、しっかりとした足取りだった。だが、二人には休息が必要だろう。

「おまえ達、少し休んだらどうだ」

李逵が二人に勧めた。

「わたしはまだ大丈夫です。それに布替えは、わたし達でなければ」

「それはそうだが、二人ともに倒れられたら迷惑だ。嬢さんにつくのは交互にしてくれないか」

黄玉は不満そうな顔をしたが、曹瑛の目を見てしぶしぶ肯いた。確かに、二人一緒に疲れ果ててしまったら雪華の手当てに支障が出る。

「わたしが、まず六刻看ています。曹瑛はその後に。六刻毎の交代にしましょう」

曹瑛は特に異をとなえなかった。本当は、黄玉がずっとついていたいのだと分かっていた。李逵の言葉に理を感じて、六刻毎の交代ということで妥協したのだろう。

「わたしに異存はないわ。それじゃ、黄玉お願い。布替えも、六刻毎にしましょう」

二人は肯き合った。

「それがいい。とにかく身体を休めることだ」

李逵はそう言い残し、一の木戸に向かった。

一の木戸では、陳統と晁蓋が蘇源の部下達と、石を積み上げたり柵の補強に精を出していた。二人とも汗を滴らせながら、手元の暗さに

悩まされながらもてきぱきと作業を進めていた。
「陳統、晁蓋来てくれ」
李逵の言葉に、二人は手を休めてやって来た。
「おまえ達二人は、交代で砦の前を見張ってくれ。後ろは、儂と石勇でやる」
「それはいいね。月明かりがあるとはいっても、昼のようにはいかないから、これで作業は切り上げるよ」
陳統が答えた。
「陳統、俺が先に見張りに立つ。休んでいてくれ。十刻で交代だ」
「おまえ達は疲れているはずだ。若いから、それを感じておらんだけだ。このままでいると、思わぬ時に身体が潰れてしまう。今夜、兵がやって来ることはないと思う。油断は禁物だがな。休めるとしたら今のうちだ。黄玉と曹瑛にも、交代で休むように言って来た。おまえ達も、無理をしないで身体を休めるのだ」
「そうだね。小父さんの言うとおりにするよ。俺達には、天下の黒旋風がついているんだものね。逆らったら、ばちが当たるってもんだよ」
「天下のというのは余計だがな」
「でも、本当に有名だったんだぜ」
晁蓋が口を挟んだ。
「無用の小父さんが黒旋風だったなんて、全然思わなかったよ」
「嬢さんには気付かれておったらしい」
「雪華姉ちゃんは勘が鋭いから」
「そうだな。隠し通せると思った儂が馬鹿だった。始めから本当のことを明かしておれば、あるいは魯櫂も、こんな罠を仕掛けなかったかもしれん」
李逵の声には、後悔の色が混じっていた。
「黒旋風だと分かっていたら、きっと小父さんを毒殺してから罠を仕掛けるよ。あの魯櫂が諦めたりするもんか」
「殺されて当然の男だとは言えたな」
「小父さんが殺したんだろう」

「いや、儂はとどめをさしただけだ。その前に、曹瑛が矢を射ていた」
陳統は、少し驚いたような顔をした。
「瑛姉ちゃんが……。弓の練習をしてるとは聞いてたけど」
「陳統、曹瑛は変わったぞ。以前の曹瑛ではない」
「瑛姉ちゃんは優しかったのに」
「大した腕だ。何よりも心が強くなった。陳統、おまえではもう、曹瑛に敵わんかもしれん」
「敵わなくたって構わないけど、少し寂しい気がする。玉姉ちゃんは近寄り難いし、起兄ちゃんも少し恐い、俺と石勇に優しくしてくれたのは瑛姉ちゃんだったんだ。それが、そんなふうに強くなったら……」
陳統は本当に寂しそうな表情を見せた。
「そうか、おまえと石勇はまだ十六だったな。心配するな。そこのところは、曹瑛は変わっておらん。相変わらず、優しいしっかり者だ。だがな陳統、遼では十五で兵役に就くのだ。儂はおまえを、子供だなどとは思っておらんぞ。大人として扱い、それだけの責任もとってもらう」
「分かってるよ、小父さん。俺達はこれで立派なお尋ね者さ。瑛姉ちゃんが変わったように、俺も変わらなくちゃ」
「おまえも変わっておるのだ。気付いてないだけだ」
「俺が」
「そうだ。きっと曹瑛も喜んでおるだろう」
「そうかな。なら、いいんだけど。雪華姉ちゃんも褒めてくれるかな」
「ああ、きっとな」
陳統は照れたような笑いを見せた。
「俺はどうだい」
晁蓋が横から口を挟んだ。
「おまえもだ、晁蓋」
「雪華のためだったら、俺は火の中だって恐くない。俺が雪華を護るんだ。たとえこんなことがあっても、俺の気持ちは変わらない」
「その押し付けがましいところは、是非変わってほしいんだけど」

陳統が呆れたように呟いた。
「何か言ったか」
「いや、別に」
陳統は、晁蓋から目を逸らした。
「まあよい。二人ともしっかりと見張っているんだぞ。蘇源の部下は休ませねばならん。命を懸けた戦いを、何度も潜り抜けた後だからな」
李逵はそう言って漢(おとこ)達の方を見た。
「そうだな、大した人達だったよ。俺の遊び仲間なんか足元にも及ばないよ」
晁蓋が、心底感心したように言った。
「これが本当の漢というものだ」
李逵の言葉が、すっかり暗くなった山の中に溶けて行った。
早くて二日、遅くとも五日のうちに討伐の兵が来る。始めは太原府の禁軍だろう。それまでにどれだけの備えが出来るか。生死の境はそこにある。李逵はそう思いながら、砦の宿舎に向かった。とりあえず今は、少しでも身体の疲れを取ることだ。石勇と交代するまで、少しでも寝ておこう。宿舎の牀(しょう)※に横になると、たちまち睡魔が李逵を襲った。薄れゆく意識の中で、李逵は雪華が名付けた輝水の庭の風を感じていた。※牀　ベッド